利用者(基礎医学)の立場から 図書館に望むもの

石 見 貞 次*

I. は じ め に

筆者は基礎医学所属の者ですが、利用者としての立場からは基礎専攻といい、また臨床専攻といっても、両者間における根本的違いは全くないものと思われませんが、筆者の立場を明確にするために標題のように記した次第で、この点予めご了解を頂きたい。

さて、筆者も図書館の利用度においては比較的多い方で、「図書館」への愛着を感じる者の1人と自認していますが、今回の寄稿を機に、普段気づいていた点や2, 3の要望など、また先年(1966年6月~1968年6月)、米国 Michigan 大学医学部薬理学教室に research fellow として留学した当時利用していた医学図書館や、国内旅行中に見学した Rochester 大学(N. Y. 州)、Penn. 大学の医学図書館などの印象、感想をも含んで述べてみたいと思います。

さて、本学の医学図書館も数年前の新築で館内外の面目も一新されました。それ以前では、とくに冬期間の書庫内での30分以上の図書調査、文献探索などをしようものなら、きつい冷えこみのため、さながら耐寒訓練のようなもの、オーバーでも着なければとても我慢できず我ながらこんな不十分な設備で能率的な研究を進めることが可能であろうかと大いに疑問と情なさを感じていたものです。しかし考えてみますと、関係者もその当時の予算ぎりぎりのところで努力し、建設されたことは想像しますが、図書館関係の各位に望みたいことは、第1に利用者の立場に立つて図書館の運営、管理に当たって頂きたいと思います。そのためには職員が利用者と密接に交流し、絶えず利用者の声を聞いて、それを現場で生

かし改善にもってゆく努力が非常に大切なものと思われます。従来のような事務的な図書の管理だけに終始する保守的、枯息的な姿勢では、これからの医学の進歩、発展に即応できる十分な図書館活動は望めないと考えられます。

II. 基本的な要望

1. 図書館の体質改善

多くの自然科学のうちでも医学が極めて重要な位置にあり、それは隣接科学の進歩を包摂しつつ、人間の根本的な命題である生命、疾病についての科学を究明するものであり、この意味では、医学は「総合科学」ともいえます。そのためには日進月歩の医学の進歩、発展に依りうる態勢が、医学に携わるすべてのものに要求されているといっても過言ではありません。したがって、ともすれば枯息的、消極的な従来の図書館のあり方ではこれらの躍進に追随できるかどうか疑問であり、この際、勇断をもって体質改善されることが望まれます。

すでに本誌上、津田氏¹⁾²⁾の報告にあるように、積極的、活動的な図書館活動の必要性を強調していることはまさに慧眼と思われます。

2. 図書館と Curriculum 改革

明治時代からのドイツ医学を規範としたわが国の医学教育は、講義を主体とする傾向が強く、いわゆる学生がノートをとれば事足りるから、学生にとっても図書館をそれ程必要とはしなかった。さらに、従来から図書館といえども堅苦しいムードが漂い、図書館にゆくのが億劫になるきらいがあり、一般的な図書数の不足、設備不十分なども手伝って、利用者の足が遠のく傾向にあった事実は否めなかった。

* Teiji INAMI, 弘前大学医学部薬理学教室

しかし考えてみると、かなりの国公私費で運営維持されている図書館が、教育効果をあげるためにもっと活用されてよいのではないのでしょうか。

今後の重要な医学教育改革の1つに curriculum 問題があり、いまのところ、医進課程のうちから専門教育も始めるべきであろうという考え方が強く、また、画一的な講義主体の授業にも大きな批判がなされ、これからは小グループ制による討議形式によって学ぶ方法、パネルディスカッション、視聴覚教材（スライド、映画、テレビなど）利用による授業が活発化してくることが予想される。つまり、学生たちが興味をもって自主的、能動的に勉強ができるような方法が要求されてくるから、必然的に図書館資料（単行本、誌誌、文献、視聴覚教材など）が大いに利用されることになるものと思われる。

筆者は留学中、可能な限り聴講（薬理学）していましたが、この特徴について簡単にいいますと、多くの staff は講義項目の基本的な骨格を大まかに講義し、終わりにその講義内容に関係する新しい reference を幾つかあげておく。学生の方はそれに目を通さぬと、次の授業への理解が遅れ、試験にも難儀するという結果になる。大学院生に対する講義では、この指示される reference の数がさらに多く、質的にも高度なものとなってくる。したがって、学生たちはどうしてもこれらの論文を図書館で探し読まねばならない。こうなると勉強も半ば義務づけられるような色彩を帯び、学生の医学図書館の利用は極めて多く、また利用者の便を計るために図書館も週日は midnight まで開館されている。筆者が訪ねた他の2つの医学図書館、Rochester 大学、Penn 大学の場合も利用者が多く、何かしら活気ある印象をうけた次第です。

いづれにしても、curriculum 改革によって図書館の利用度は高まるものと想像されるから、このような認識のもとに教育効果をよりあげえられるように、図書館機能を full に役立てて頂きたいと思います。

III. 具体的な要望

1. 開館時間の延長

これについては、本誌上曾我部³⁾、相良氏⁴⁾らの報告があり、氏らが臨床研究者の便を計って開館時間を延長してはみたが、実際には予想に反して利用者は少なく、またこの理由として相良氏は、現在の図書分散管理方式、つまり教室備付図書が非常に多いため、図書館ではせいぜい2次資料を見る程度になってしまうためであろうと指摘している。

しかし利用者にとっては、いつでも気軽に図書館にゆける状態にあることが望ましく、開館時間にもっと幅をもたせてほしいと思います（本学医学図書館の場合には現行、月～金：9：00 AM～6：00 PM、土：9：00 AM～12：30 PM）。

閉館時間が早いと、文献探索などのためには他の仕事を後廻しにせざるをえない。また、多くの研究生のなかには毎日夕刻より研究室にきて実験を始める方もいますから、このような階層にとっては図書館の利用は全く望めません。臨床専攻の研究者にとっても比較的に時間の余裕ができるのは夜間です。

一方、学生の場合にも授業時間割りは、月～金：4：30 PM、土：12：00 PMとなっていますから、利用性は極めて低い。

参考までに Michigan 大学構内にある21の図書館のうち、主なものの開館時間を表に示しました。筆者はこの通り真似て実施してほしいというわけではありません。医学図書館が国から強力な経済援助をうけている米国なみにはいかぬでしょうし、また、前記の方たちの報告³⁾⁴⁾にもあるように、開館時間を延長するための人員確保、職員配置、手当などの問題とかいろいろ難しいことがあるようですが、関係各位のご協力によって是非この問題の対策を講じて頂ければと思います。

表 Michigan 大学の主な図書館の開館時間

	Medical Library	General Library	Undergraduate Library
月～金	8～12 Midnight	8～12 Midnight	8～12 Midnight
土	9～5 PM	8～6 PM	8～10 PM
日	2～12 Midnight	1～12 Midnight	1～12 Midnight

(1967～1968)

2. 学生用図書コーナーの設置など

これは、以前より気づいていたことの1つです(すでに何らかの形で実施している図書館もあると思います)が、閲覧室を最も多く利用するのは学生層のようです。また、今後は図書館の利用度も一層高まってくるものと予想されますから、閲覧室内の適当な位置に学生用参考書、図書などを一括して本棚に並べ、学生が自由に手にとって見れるように学生用図書コーナー(もちろん誰が見てもよいが)というようなものを設けてほしい。館外持ち出しの場合に借用証を提出することは従来同様ですが、閲覧室内だけで見る場合には自由閲覧制にしたらいかがでしょうか。また、利用頻度の高い図書は多数用意されるべきでしょう。このようなことで非常に気軽な親しみあるムードが醸成されるものと思われます。

また、閲覧室内に space があれば、主として研究者向けに、統計上最も利用度の高い雑誌(和洋)の数種、あるいはそれ以上のものを閲覧室におき、これも自由閲覧にする方が便利と思います。何でも書庫に保管しておくのは考えものです。

3. 視聴覚教材などの設備

このことも図書館活動の一端として期待したいことです。とくに基礎医学における授業でも、各種のスライド、映画、テレビなどの利用が極めて教育効果のあることが明らかですが、これらに必要な資料、機材などを学部内で統括、総合し設備してくれる中枢がありません。各教室個々の事情に応じて集め間に合わせている現状ですが、この方面の中枢としては図書館が最もふさわしいと思われます。医学教育関係のスライド、フィルム、レコードなどや、機材(プロジェクター、映写機など)、さらに語学教育、研究のためには各種の吹き込みテープ、レコードなども備え、そこでは利用者が自由に lesson ができるようにする。つまり、視聴覚ライブラリーを図書館内に設置し、医学、語学教育面でご協力をお願いしたい。これも図書館活動の幅を広げることになることと思います。

4. 文献探索と電算化

文献探索、調査などの work は研究者にとっては重要な問題の1つであり、これについては多数の方たちがいろいろと本誌上で報告⁹⁾⁷⁾されています。やはり利用者としても同様に望みたいことは、図書館職員の質的向上という問題に尽きます。裏田⁹⁾、恩地⁷⁾氏らも指摘されるように、研究者に具体的な協力ができるよう少なくとも全ての職員が2次資料には精通し、指導ができるよう

な態勢をとってほしいという点です。

第2には、近代医学の高度な発展に伴い、研究者自ら収集できる文献探索範囲は極めて制限されつつあり、さらに、1つの図書館だけで完全な収集を望むことはとても不可能であります(とくに小規模の医学図書館ではなおさらである)。情報洪水の時代といわれるように、これらの交換、処理が合理的、スピーディーにされるためには、どうしても機構としての機械化、電算化⁹⁾の導入が必要と思われます。すでに我が国でもテレックス、PANDEX の実施、あるいは導入を前提としての MEDLARS¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾がいろいろの角度から検討されているようですが、電算化時代に対処するための準備体制は、いまから検討してよい問題と思います。

5. 利用者への Guidance と PR

full に発揮される図書館機能、つまり利用者にどんどん活用されるところに生きた図書館像があります。それで、医学部学生が新しく入学したときには医学図書館についての一般 guidance (案内、説明など)を、また、卒業前には文献探索、調査などについての guidance を是非実施して頂きたい。

文献探索などについての指導は、従来では不十分ながらわれわれ自身が大学院生、新入教室員および研究生などに行なってきたのですが、次々に新しく発行される索引誌の知識、解説、あるいは探索技術、また、古くからの索引誌でもいろいろと改良が加えられてきますので、これらのすべてについて精通してゆくことは、到底われわれにはできません。やはり、この問題については図書館職員の方が適当な方法により解説、指導の guidance を実施して頂きたい。

次に、利用者へ PR のにつきましても常に心がけてほしい問題であります。このためには、図書館報の発行(毎月、もしくは隔月など)、あるいは利用者との懇談会、座談会なども計画して積極的に実行して貰いたいと思います。図書館職員の方は利用者の声、あるいは利用者からの反応などには鋭敏であってほしい。

6. 図書館長の問題

このことは、与えられた theme から些か逸脱することかと思われましたが、現在の医学図書館のあり方という面からみますと、やはり核心的問題と考えられますので簡単に所感を述べます。

すでに半田氏¹³⁾もいわれる通り、今日の高度、かつ広範囲におたる医学教育、研究の領域では一層の分化が進み、医学は極めて複雑多岐になってきています。したが

って、各自の専門分野に心血を注ぎ専念すればする程、余暇などはとても生じえない時代であり、これまでのように医学部の教官が片手間に館長職をする時間的、労力的余裕は見出し難いのではないのでしょうか。一方、利用者からみても実際上の管理、運営の権限、責任者は館長か司書か、あいまい性が多いように見受けられます。したがって、形式的、名目的な館長はますます虚像化の傾向にあるように思われます。

図書館長には図書館学を専攻した若い有能な人材をすえ、強力な権限のもとに円滑な運営と管理を任せ、医学部教官はむしろ顧問的存在の方がより効果的ではないでしょうか。

IV. お わ り に

いま、わが国の医学界では根本的改革¹⁴⁾がなされ、変貌する社会構造に対処しつつ医学の進歩、発展を医学教育にも体系づけようとしているとき、医学図書館のあり方についても、いま一度考慮し、もっと活発な積極的な協力者としてのあり方が要望される。

終わりに、米国医師会副会長 Blasingame 博士¹⁵⁾の言葉を引用し、医学教育と研究に携わるわれわれの寄せる期待と信頼を皆様にお伝えしたいと思います。

The two fields—medicine and careers allied to it—are inseparable. They are equal partners working together in a common cause of the highest order—making life healthier, happier, and more productive for each of us.

以上、忌憚のない要望を述べましたが、筆者の意のあるところをお汲みとり願えれば幸いです。

<文 献>

- 1) 津田良成：医学図書館員教育の急務，医学図書館，3(3.4)：148～151，1956.
- 2) 恩地宏和：医学図書館界に入って，医学図書館，13(4)：279～280，1966.
- 3) 曾我部昭美：時間外開館とその問題点—和歌山医大一，医学図書館，12(2)：79～82，1965.
- 4) 相良侯秀：時間外開館—職員配置と労務管理上の問題，その他—，医学図書館，12(2)：83～86，1965.
- 5) 津田良成：医学図書館における Reference Service. 11(1)：1～6，1964.

- 6) 岡本歌子：研究者の情報収集，医学図書館，11(1)：17～19，1964.
- 7) 五十嵐有行：Reference Service の現場から，医学図書館，13(2)：143～147，1966.
- 8) 裏田武夫：医学図書館員教育—現場をもつ科学の立場から—，医学図書館，13(2)：89～96，1966.
- 9) 裏田和夫：電子計算機導入とその周辺，医学図書館，15(4)：325～337，1968.
- 10) 津田良成：MEDLARS——医学文献の機械検索，医学図書館，10(3)：60～69，1963.
- 11) 谷口真弓：MEDLARS による文献検索サービス—Demand Search Service—，医学図書館，11(5)：201～217，1964.
- 12) 小川治之，ほか訳：MEDLARS 1963～1967. 医学図書館，16(1)：47～64，1969.
- 13) 半田順俊：医学図書館のあり方と問題点，医学のあゆみ，72(2)：93～96，1970.
- 14) 日本医師会：医学教育制度改革への意見，医学のあゆみ72(1)：39～51，1970.
- 15) Blasingame, F. J. L.: Horizons Unlimited (A Medical Careers Handbook), American Medical Association, 1966.: A Message to Students, iii.

*

*

*